特集
下水道元年

水と生きる

大河信濃川と中ノ口川に囲まれた白根市。新潟市などの都市圏近くにありながら、私たちの身近には、思いがけないほどたくさんの自然が残っています。

特に川は、私たちの生活に欠かせない水を提供してくれます。また鳥や魚、昆虫など、さまざまな生物たちの宝庫であり、子供たちが遊び、学ぶための格好の場となっています。

今年は白根市でも下水道事業が始まる年。水とふれあう人たちの姿を通して、川の大切さ、素晴らしさをもう一度考えてみましょう。

川の素晴らしさ 子供たちにも知ってほしい

信濃川漁協白根支部　**高井一衛**さん

「数が減ったのは川ガニとイトヨかなあ。でもイトヨは今年ばん回したみたいだよ」。そう語るのは、信濃川漁協白根支部長の高井一衛さん（能登五・六十九歳）。漁ができるときであれば毎朝中ノ口川へ出るという根っからの川好きです。

「小さいころから魚を捕ったり釣ったりするのが大好きでね。見よう見まねで始めたんだ」。昭和四十年代前半、漁を始めたころは仲間もいなかったため、信濃川側の臼井支部に所属。昭和五十年になって、自ら中ノ口川側に白根支部を設立させました。以来、放流事業や、ごみの不法投棄を取り締まる河川パトロール、小学校の子供たちへの魚の飼育指導など、中ノ口川を守るために、さまざまに心血を注いできました。

「一時に比べれば中ノ口川もきれいになった。ごみを捨てる人も減った。サケもたくさん上るようになったね」。高井さんたちの活動は、二十年たった今、ゆっくりと実を結びつつあります。

「まず、二月は寒ヤツメ（ヤツメウナギ）。その後三月ころからイトヨ、四月にはサクラマス(注)が海から上ってくる。川ガニは九月から、サケは十月から。コイ、フナ、ウグイは年中だね。ボラなんかもいるんだ」。中ノ口川で捕れるたくさんの魚類。それらの幾つかは高井さんら漁協による放流努力によって、その営みが守られています。

「コイ、フナは毎年、三百から四百キロくらい放流している。サケは捕ってもほとんどを漁協本部へ回す。卵をとってふ化させるからね。自分で捕って食べるのはサクラマスくらいかな。それも本数が少ないから制限してるんだ」。

高井さんの本業は酒屋さん。漁はあくまで趣味というスタイルは、他の会員もみんな同じです。「昔は職業漁師もいたけどね。オレたちはもうけが目的じゃない。ただ川が好きなだけさね」。漁協の会員は三十人。河川工事になれば工事業者と打ち合わせ、建設省の環境調査になれば船を出して協力する。魚を愛し水を守る、中ノ口川の『番人』たちなのです。

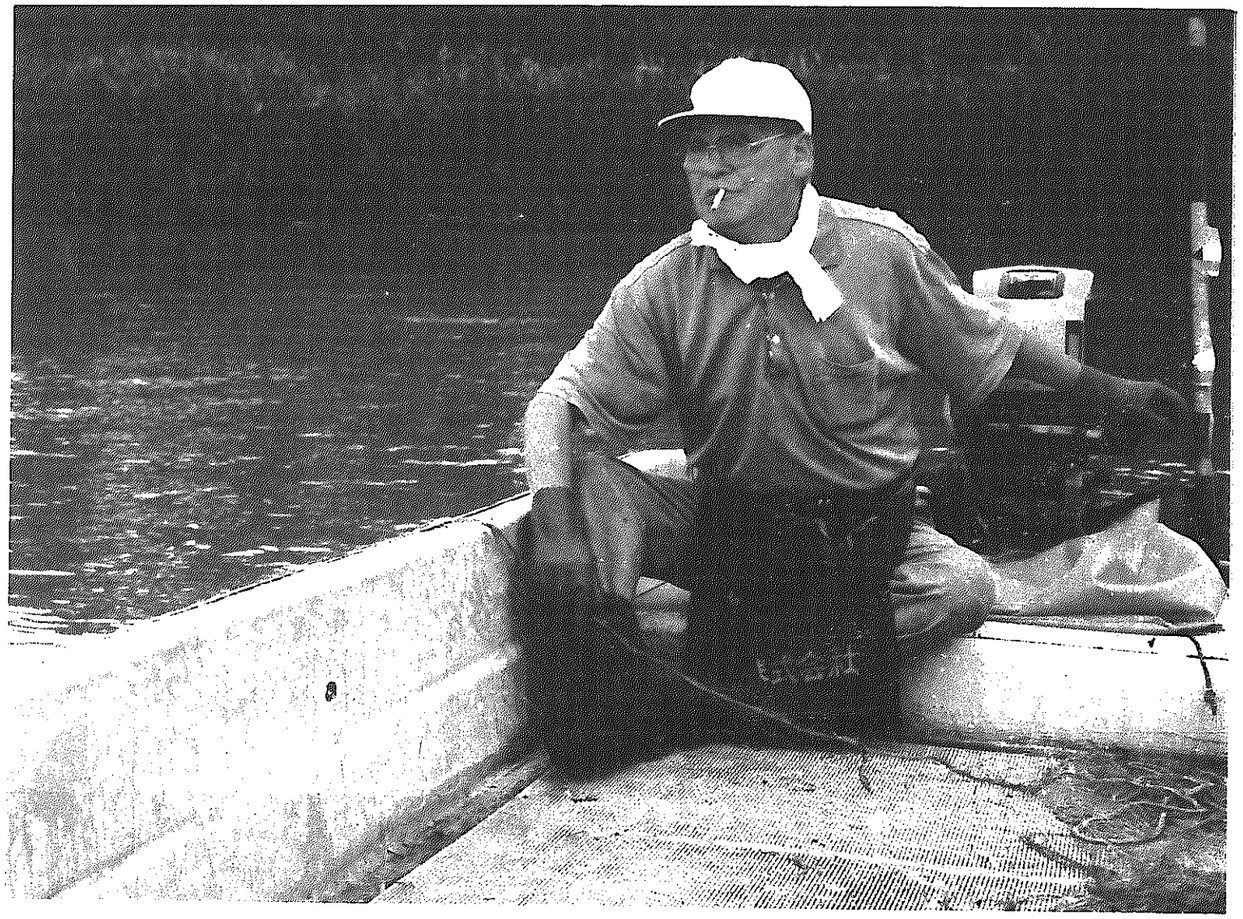
釣り大好き少年だった高井さん。川で遊んだ記憶を苦もなくたどります。

「よくフナ釣りをやったねえ。みんなであちこち出掛けて。小さい川にも魚がいて、そりゃあたくさん釣れたもんだ」。

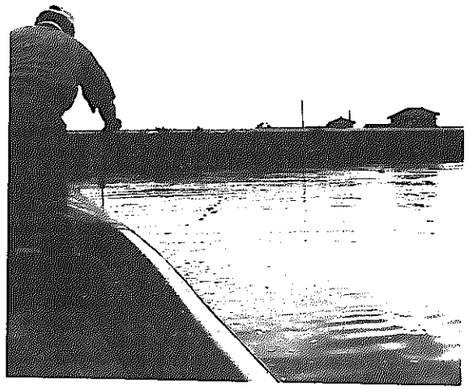
三年前、高井さんたちは、今の子供たちにも川の素晴らしさを知ってほしいと、サケの卵を白根小学校の五年生に分け与えました。子供たちは見事、ふ化を成功させ、翌春、五センチほどに成長した稚魚たち二千匹が中ノ口川へ放たれました。この事業は以後毎年、続けられています。

「子供は育てるのが上手だよ。オレたちがやるよりずっと大きくなるんだ」と高井さん。「今、その子供たちが『川をきれいにしよう』と呼び掛けてくれている。うれしいさね」。

日に焼けた顔がほころびました。



◀長さ１００メートル、深さ５メートルもの網を川面いっぱいに流していく「流し網漁」。船ごとゆっくりと下流へ流されていく途中で、遡上するサケなどが網に刺さり、絡まる。



注・サクラマス
サケ科サケ属。渓流魚ヤマメの降海型。上流域でふ化し、2年ほど川で過ごし海へ下る。1年で体長約５０センチほどに成長し、春、母川へ戻って産卵する。銀色の魚体が美しい魚。富山のマス寿司は有名。